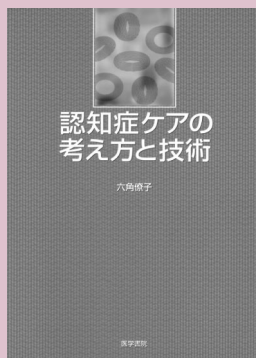


（認知症の人たちに必要なのは しっかりした理解とほどよい手助け）



認知症ケアの考え方と技術

六角僚子 著 B5 判・168 ページ 定価 2,520 円(本体 2,400 円+税 5%)
ISBN 4-260-33400-X 医学書院 2005

評者

加藤基子

名古屋市立大学看護学部研究科
ケアシステム看護学分野・訪問
看護学教授

この本は、認知症の人たちが当たり前の生活を全うしていけるような、ほどよい手助けの仕方について、エピソードをふんだんに使った優しい文章で丁寧に書かれています。

認知症の人に、 肩書きを外して「出会う」ことから始めよう

まず 1～3 章では、認知症ケアにおいて必要な知識と考え方が述べられています。たとえば認知症の中核症状である「見当識障害」の項では、84 歳の方が 5 分前は 50 歳と称していたのが今は 18 歳と変わり、その年齢に応じておばちゃん、お姉さんと呼び分けられることを、著者は「人生の行き来」をしていると表現しています。素敵なお考えです。「自分の世界を生きる」Ｓさんと著者とのかわり合い方が読み手の胸に素直に伝わります。

認知症ケアで最も大切なのは、自分の世界を生きる認知症の人と「出会う」ことです。出会うにはありのままの自分、不器用で悩みながら暮らしている自分を、丸ごとそのままさらけ出さねばなりません。これは、ある意味で怖いことかもしれません。白衣や肩書きを外して自分そのもので向かい合うのですから。しかし、この出会いは認知症の人を対象化しない、一方的にケアされる人にしない関係を作り、ケアという大義名分で認知症の人の可能性や能力をつぶしているのではないかというジレンマからケア

従事者自身を解放します。肩から力が抜け、お互いに気持ちのやりとりができ、共にあることを実感し、仕事を抜きにした「一人の人間」として、相對することができのです。

共にありながらケアをすること

続く 4～8 章は、専門職としてのケアの仕方について書かれています。ここには、数多くの認知症ケア従事者の想いと、著者の研究者としての観察力と感性から導かれた基本的対応と援助技術が、読み手と一緒にケアを紡ぎ出せるように具体的にわかりやすく記述されています。

私は最近、「共にあること」と「ケアをすること」のつながりが気になっていますが、後半の日常生活を支える援助技術の章では、「共に行ない」「一緒に」等の表現が随所に出てきます。さらに「なぜ洗面所に排泄するのだろうか」というような、ケア従事者が当たり前と考えている状態からの乖離に、「なぜ」と疑問を持ち、察していくことも繰り返し述べられています。この「一緒にする」と「なぜ」は、「共にあること」と「ケアをすること」を両立させるヒントになります。

なお、最後に取り上げられた性についてですが、異性への表現や行動に困惑する現状は、認知症ケアの場が病気を治す治療の場ではなく、生活の場であると承知している私たちに対して、生きるにふさわしい生活の場なのかと問いかけてられているように思えます。

認知症ケアには課題がまだまだいっぱいあります。本書を読み、著者の著す世界に触れながら、志をもって進んでいきましょう。

■ご購入は、最寄の医書専門店または医学書院販売部 電話(03)3817-5657(直通)まで。
ホームページ(<http://www.igaku-shoin.co.jp>)からもお申し込みいただけます。